

美的知覚力を高める図画工作科の 鑑賞題材に関する研究開発

— ケッターリング・プロジェクトと美的知覚(Aesthetic Eye)プロジェクトのコンセプトを基に —

中村 和世・青山 寿重*
(2012年12月7日受理)

Research Development of an Art Appreciation Unit of the Arts and Crafts to Develop Children's Aesthetic Perception: Based on the Concepts of the Kettering Project and the Aesthetic Eye Project

Kazuyo NAKAMURA and Masue AOYAMA

Abstract. A model unit of art appreciation for elementary school children is developed based on the key concepts used in the Stanford's Kettering Project and the Aesthetic Eye Project. Such a unit sets up the concept and the principle from the tradition of visual arts that children should understand in order to produce their own art in a creative way. The organization of the lessons correlates art appreciation with art production in such a way that children enhance the aesthetic perception in the process of applying the concept and the principle to their own creative process and that they can look at art through an eye of the artist. The qualitative study was conducted to measure the effectiveness of such a unit with the eighteen 6th graders in a public school. Harry S. Broudy's theory of aesthetic education is used to analyze children's aesthetic perception. The study finds that this type of unit effectively develops the aesthetic perception of children.

1 問題の所在と研究の目的

我が国の小学校の図画工作科カリキュラムの課題として、子どもの内側からの創造性の育成を重んじるあまり、他教科に比べて、専門的な知識・技術の体系に裏付けられた学習内容が確かな根拠を持って十分に組織化されていないことが挙げられる。公教育の一環である図画工作科において、一人ひとりの子どもの感情を育み、すべての子どもが生涯を通して芸術文化を享受できる力をつけるために、どのような知識・技能が最低限必要とされるのか、美術科教育学の研究分野でも十分に議論が深められていない現状がある。

海外に目を向ければ、教科カリキュラムに関する研究開発が進んでいるアメリカ合衆国では、美術教育に関する大型のカリキュラム開発プロジェクトが1960年代から1970年代にかけて盛んに行

われ、プロジェクトを通して美術の学問領域に裏付けられた幼稚園から高等学校までのカリキュラムの内容が整備され、1994年に公表された全国視覚芸術スタンダードに反映されている。また、カリキュラム開発プロジェクトの根拠となった、美術の学問領域に依拠する美術教育の考え方はDBAE (Discipline-Based Art Education) という名称でまとめられ¹、美術教育改革運動として1980年代以降、全米に広がり、今日、アメリカ合衆国では、美術教科は学校教育のコア教科として米国教育省や学校教育関係者の間で認識されている²。

アメリカ合衆国において1940年代から1960年代にかけて広く支持されていた、今日の我が国の図画工作科のあり方にも浸透している「創造性は子どもに生まれながらに備わっており、励ましと機会さえ与えられれば自然に伸ばされる」という

*広島県尾道市立瀬戸田小学校

考え方は、DBAEの美術教育改革運動によって「子どもの創造性は、視覚芸術の伝統の理解を通して伸ばされる」という考え方に移り変わっている。子どもの創造性に関する前者の前提に立てば、図画工作科のカリキュラム内容の組織化は必ずしも必要とされないが、後者の前提に立つのであれば、美術の専門領域から導かれる知識や方法を子どもの創造性を伸ばすためにどのように組織化していくかが課題となる。

DBAEの美術教育の考え方の基礎を作った主要なプロジェクトで開発されたカリキュラムの特色は、視覚芸術の伝統から導かれた芸術家による創造の原理を組み入れた構造となっていることである。本研究は、カリキュラムを構成する単位である題材に焦点をあてて、DBAEの美術教育の先駆けとなったスタンフォード大学ケッターリング・プロジェクトおよび美的知覚 (Aesthetic Eye) プロジェクトで用いられた題材開発の方法を活用して鑑賞題材を作成し、授業実践を通してその教育的効果を検証することを目的とする。我が国の図画工作科において、美術の専門的な知識・技術の体系に裏付けられたカリキュラムの構造を考えていくために、本研究では、題材レベルでの試行・実験を試みたいと考える³。

II 研究の方法

1. 理論的枠組み

我が国でも紹介されているケッターリング・プロジェクト⁴、及び、美的知覚プロジェクトのカリキュラム開発⁵は、共通して、視覚芸術を生み出すのに必要な技術や感受性、人間や自然の作り出す視覚形態に敏感に反応する能力などは、自動的に学び取られるようなものではなく、視覚芸術の伝統や芸術家による創造を理解する学習を経て高められるという仮説のもと進められている。一般的に広まっている学校教育で学ばれる教科の中でも美術教科は特殊であり美術が得意な人に限られているという見方に対して、教育によって誰でもが芸術文化を享受するのに必要な感受性や知覚力を高めることができるという見解のもと、その実現に向けて新しいアプローチを開発した点に、これらのプロジェクトの大きな意義がある。そして、両プロジェクトでは、美術を専門としない学級担任が担当する小学校の美術教育に焦点をあて

たカリキュラム開発が行われている。

美術の専門的知識・技術の体系によってカリキュラムの構造化を図るという点から、ケッターリング・プロジェクトによる開発で特に着目すべきは、図1⁶に示されるように、視覚芸術の伝統から導かれた「概念」や「原理」が構成要素として組み入れられ、段階的な一連の授業を通して子どもの理解が拡大するような構造となっていることである。プロジェクトで扱われた学習内容は、「表現」「批評」「文化」の3領域から構成されており、「批評」に関してしてみると、概念には、視覚芸術の基本要素である色、線、構成が取り上げられている。また、原理については、「色は伝達したり、感情を呼び起こしたりすることに用いることができる」のように、芸術家の創造から導かれた基本的内容が示されている。プロジェクトの実際では、作品を前にした美術批評の活動を通して、色が実際にはどのような働きをするのか、子どもが自らの感性を基に認識させる学習が行われている。

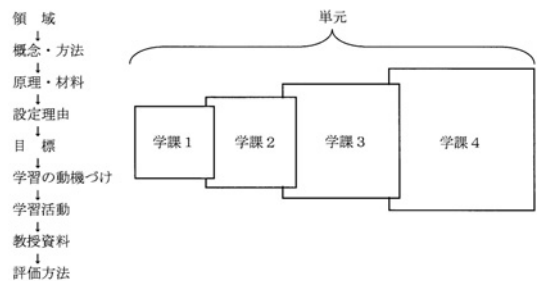


図1 ケッターリング・プロジェクトのカリキュラム構造

ケッターリング・プロジェクトと同様に、美的知覚プロジェクトでは、視覚芸術の美的特性を構成している色、線、コンポジションなどに着目させながら、作品に見出される芸術家の創造的思考を認識する活動を通して、子どもの美的知覚力を高めることが目指されている。美的知覚力とは、人間の感情や価値のイメージを伝達する芸術作品などから、自らの感性を基に人間性のある意味を生成できる力のことであり、プロジェクトでは、表1に示す4つの美的特性に対する感受性とそれらを読み取るスキルである美的リテラシーを高めることで美的知覚力の育成が目指された。そのようなアプローチは、教育哲学者であるハリー・プロ

ウディ (H.S. Broudy) によって提唱されたものであり⁷、プロウディは、旧来のスリー・アール(読み書き計算)に加えて4番目のアール(A‘R’ T)として美的リテラシーを学校教育ですべての人に保障すべき必要性を唱えた。

表1 プロウディによって示された芸術作品の美的特性

芸術作品の美的特性	具体的な項目
感覚的特性	色、形、線、質感、動作などの特性
形式的特性	繰り返し、バランス、対比、統一など、形や色などの感覚的特性による構成の特性
技術的特性	技術、使われている材料などの特性
表現的特性	明るい、楽しい、悲しいなどの感情やイメージの特性

本研究では、ケッターリング・プロジェクトと美的知覚プロジェクトにおける上記のようなアプローチに基づいた鑑賞題材の開発を行う。具体的には、視覚芸術の構成要素である色や形などを基に芸術家による創造と子どもによる創造とを媒介する原理を設定し、子どもの美的知覚力を高めることを目的とした鑑賞題材を開発する。

2. 鑑賞題材の研究開発

(1) 研究開発における仮説

以下の仮説を基にした鑑賞題材を開発し、授業実践を通してその教育的効果を測ることをねらいとする。

視覚芸術の構成要素である色や形などを基に芸術家による創造と子どもによる創造とを媒介する原理を明確にした題材開発を行えば、芸術家が作品に表したイメージと子どものイメージとの共有が効果的に促され、子どもの美的知覚力を広げ深めることができるだろう。

(2) 研究開発の方法

○ 題材について

鑑賞作品は、ピカソの作品「泣く女」(1937年)であり、この作品から見出せるピカソの創造と児童の創造とを媒介する原理として、「形や色、組

合せを生かした表現を工夫して『感情』を表すことができる」を設定している。学習では、表現活動と鑑賞活動とを相関させ、①初めの鑑賞→②表現→③終わりの鑑賞という学習構成を計画し、自画像を制作するという自らの目的のためにピカソの作品鑑賞から学ばせる活動を通して、児童の美的知覚力を高めることをねらいとしている。「初めの鑑賞」活動では、「泣く女」から聞こえる声を切り口に児童が作品の造形的特徴に触れる。「表現」活動では、児童自身の感情(喜怒哀楽)表現のために、作品に見出せるピカソの表現の工夫を活用しながら、自分なりの表し方を創り出していく。「終わりの鑑賞」活動では、友達と交流しながら、ピカソの作品を再度、鑑賞する。このようなアプローチによる鑑賞題材によって、児童は見たとおりの表現でなくてもすばらしい表現ができることに気づき、形や色、組合せなどの美的特性を基に作品を読み深める力を高め、見る楽しさや表現する楽しさを一層感じることができると考える。本稿では、学習指導計画の第四次である「再度ピカソの作品について、感じたことを交流する」の学習指導案を載せている。

○題材名：「形と色のアート～聞いて・見つめて・表して～」

○鑑賞作品：パブロ・ピカソ「泣く女」(1937年)



©2012-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

○題材の目標

- ・自分なりの見方・感じ方・考え方から、自分の言葉で能動的に関わろうとする。(造形への関心・意欲・態度)
- ・形や色に親しみながら自分の表現したいものを思い付くことができる。(発想や構想の能力)

- ・思い付いたことを基に、形や色、組合せを生かした表現を工夫して「感情」を表すことができる。(創造的な技能)
- ・美術作品や自分たちの作品について、画面構成や、形や色、組合せを生かした表現のよさや工夫に関心をもって話し合うことができる。(鑑賞の能力)

- 第二次：形や色の組合せを工夫して「感情」(喜怒哀悲)の表現を試す。(1時間)
- 第三次：「感情」(喜怒哀悲)を表現した自画像を描き鑑賞し合う。(2時間)
- 第四次：再度ピカソの作品について、感じたことを交流する。(1時間)

○学習指導計画(全5時間)

第一次：ピカソの「泣く女」を鑑賞して気付いたことを話し合う。(1時間)

(3) データ収集

広島県尾道市立瀬戸田小学校で青山が担任する学級において、児童24名(男子：14名、女子：10名)を対象に、開発した題材を用いて平成21

第四次の学習指導案

学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法)
<p>1 本時の学習内容の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ○形や色を手がかりにピカソの絵についての思いを交流し、表現の面白さについて考えるというねらいをはっきりもつ。 ○本時のめあてを確認し、見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分たちが「感情」を表現した上で、再び本時でピカソの「泣く女」について意見を交流することを伝え、学習の見通しをもたせるようにする。 ・事前に自分の表現した作品の見所についてカードに書かせておき、相手に伝えることができるようにさせる。 	
<p>ピカソの作品について、形や色を手がかりに感じたことを交流しよう。</p>		
<p>2 表現の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ピカソの作品と合わせて自分たちの作品を鑑賞し、工夫点を交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ■「感情」を表現した作品の工夫点を、「形」「色」「感じ」の視点で話し合わせる。 ・自分や友達の作品の表現の工夫について交流し、ピカソの「泣く女」の表現から参考にした点や自分なりの表現で工夫した点などを発表させる。 ・互いの感想を一斉に交流できるように、教室の環境整備やワークシートの工夫を行う。 ・肯定的な視点で交流できるようにさせる。 	
<p>3 友達との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ○互いの作品を鑑賞した後、ピカソの作品を改めてみて「泣く女」のよさを一層深く感じ取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ★自分たちの作品と照らし合わせて、再度「泣く女」を鑑賞して感じ取ったことや考えたことを交流させ、考えを深めさせる。 ・「泣く女」を改めて鑑賞し、ピカソの感情表現のすばらしさを感じ取らせる。 	<p>(鑑賞の能力)</p> <p>ピカソの作品について、画面構成、形、色、それらの組合せを生かした表現のよさを感じている。</p> <p>(発言内容、ワークシート)</p>
<p>4 本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「泣く女」を基に、絵画は見たとおりの形や色でなくてもすばらしい表現ができることに気付かせる。 ・見る楽しさや表現する楽しさを共有しながら絵画の見方を広げる活動のよさに気付かせる。 	

年10月から11月にかけて授業実践を行った。

瀬戸田小学校は、平成20年度から尾道市教育課題解決図画工作科パイロット校に指定されており、「豊かな感性を育む図画工作科の創造」をテーマにカリキュラム開発を進め、平成21年度からは図画工作科におけるポートフォリオ評価法の研究に取り組んでいる。青山による実践研究では、①初めの鑑賞→②表現→③終わりの鑑賞という3段階から構成される学習に応じた3種類のポートフォリオを作成し、児童が学習を振り返り自分自身の成長を確認し次の学習への見通しを持たせる指導評価を行っている。本研究の目的のために、授業で用いられたすべてのポートフォリオのコピー及び児童作品の写真記録を、児童の許可を得て、データとして収集している。欠席などの理由ですべてのポートフォリオが揃っていない児童については、欠損データとみなし、対象から外している。最終的に18名の児童のポートフォリオから得られた質的データ、及び、児童作品の画像データを収集・分析している。

ピカリにチャレンジ②

～ 僕も私も天才画家 ～

名前

題名: 苦しむ私
 解説「ここがピカリだ」: つめるとがうせて、苦しみがうも怒りがある、というところを表現した。目の白をなくして、赤にした。そこから苦しんでいるという表現できたらと思った。

ピカリにチャレンジしたよ(交流タイム)

形 服の破れた形が苦んで、破れた形がすこい。	色 目の中も赤くぬえている所がいいと思う。とてもむかいて苦しいというのがよく伝わってきた。	色 背景がクワカワトモやモヤモヤかみかみかとなるくやい。赤い怒りが見える。
振り返り: 友達感想で見て、私が「かみか」ったのが、背景まで「エモ」ってすてきな感じがしたのでもううれしかった。ふたつと思ってた。お返し得てお返しよ。		

図3 途中段階のポートフォリオ

ピカリにチャレンジ

～ 僕も私も天才画家 ～

名前:

私の付けた作品名 苦しむ人

目が、たれていて、少ししんどそうに感じられます。それと、歯をくいしばっていることから、「苦しむ人」にしました。

こんな声が聞こえるよ



苦しい... 助けて...
 暑い... 苦しい...
 早くここから出てほしい。
 だれか、早く助けてよ。
 苦しい... もういいよ。
 へただ。助けて。

こんなイメージでピカリを表現するよ(最初の鑑賞)

人間は、普通その人に似たりは描くけど、ピカリの絵は、どよどよと、
 けど、その絵からは、たくさんの感じ方ができる。無言で訴えかけてくる。
形: 私は、いろいろな形を混ぜて、悲しみの気持ちを表現したい。
色: とても不気味な色、髪の色が黄色、ささいな色という感じが、
 絵にその顔に黄色い髪の色と気持ち悪い感じ、私も少し、不気味な顔にしたい。

図2 初期段階のポートフォリオ

ピカリにチャレンジ③

～ 僕も私も天才画家 ～

名前

題名: 苦しむ私(私) 泣く女(ピカリ)

新発見!「これがピカリだ」(表現後の鑑賞)

ピカリの作品は、1つの作品に、たくさんの感情が表れているからすごい。そして、色を使い分けが、ものすごく上手。かげが、ふたつの黒い顔、みどりを使って、不気味な色で表現しているのが、おもしろくてすごい。このかみか、かみかしていること、また、新しい感じ方ができていい。色も、「何でこんな色なん

と思うくらい、目を使い分けて、とても変な顔と感じた。とても、不思議だと、「すごい」と思った。理解が作品から伝わる。

振り返り: クラスで選べた、ピカリの人の絵は、とてもピカリ、(おもしろい)と思った。黒い顔、赤い顔、見ると、ピカリの絵は、すごい絵は、すごい絵だから、始めと終わりは、ほほほと描こうと思った。

図4 最終段階のポートフォリオ

(4) データ分析の方法

学習の初期段階のポートフォリオに記された「最初の鑑賞」にある形と色に着眼した記述内容と、学習の最終段階のポートフォリオに記された「表現後の鑑賞」の記述内容を基本とした分析を行っている。記述内容の質的データは、佐藤による質的データ分析法⁸に基づいて、定性的コーディングを行い、コード間の継続的な比較を通して概念的カテゴリーを作成している。定性的コーディングの分析過程においては、文脈を大切に、児童の記述内容を、ポートフォリオの他の部分及び児童作品と合わせて総合的に解釈し、コードを割り当てている。また、継続的比較法によって、質的データとコード、複数のコード、コードと概念的カテゴリー、複数の概念的カテゴリーを数回にわたって往復し、部分と全体が十分噛み合うまで分析している。概念的カテゴリーについては、図1のプロウディによって示された芸術作品の4つの美的特性を概念的カテゴリーの基本としながらも、データ分析を通して新しい概念的カテゴリーを生成するよう努めている。さらに、それぞれの概念的カテゴリーに属する種々のコードの数量を、学習の初期段階と最終段階に関して比較し、質的データのみでなく量的データによっても教育的効果を測っている。

III データ分析の結果

表2は、開発された題材を用いた授業を通して、学習の初期段階と最終段階とでは、対象とした児童18人の知覚する内容にどのような変化が表れたのかを示している。児童の記述内容の分析からコードを生成し、継続的比較法によってコードから概念的カテゴリーを作成している。分析の過程では、プロウディによる4つの美的特性では表せない、描かれている事物に関する「題材的特性(M)」を新しく加え、それら以外のものを「その他(O)」として分類している。

分析からは、すべての児童において、最終段階の鑑賞では、初期段階の鑑賞と比べて、題材的特性、感覚的特性、形式的特性、技術的特性、表現的特性のいずれか、または複数に関して着眼点が増え、それらの着眼点を基に自らの感じ方を深めていることが示された。

表3は、対象とした児童全体においては、学習

の初期段階と最終段階では、それぞれの概念的カテゴリーに関してどのような内容の変化が表れたのかを示している。題材的特性、感覚的特性、形式的特性、技術的特性、表現的特性のすべてにおいて、作品のより詳細な部分への着眼点が増えている。また、表現的特性に関しては、単一ではなく「怒り・悲しみ」のように複数からなるより複雑な感情を捉えられる見方に変化していることが分かる。さらに、「その他」のカテゴリーの内容変化を見れば、学習を通して、児童が「作家への尊敬の念」、「作家への畏敬の念」、「作家への共感」、「作家の感性に対する驚き」、「新しい発見の喜び」、「表現への意欲」など、ピカソの創造に対する敬愛の念、知的好奇心、共感を形成していることが示される。

グラフ1は、初期段階と最終段階におけるそれぞれのカテゴリーに属するコード数の変化を示している。すべての特性についてコード数が増加しており、開発された題材による学習を通して、児童の美的知覚力が広げられたことを示している。

グラフ2、グラフ3、グラフ4は、初期段階と最終段階では、「感覚的特性」、「形式的特性」、「表現的特性」のそれぞれに関する児童の着眼点が全体としてどのように変化したのかを示している。グラフ2とグラフ3において、感覚的特性に関する着眼点が全体的に減少しているものの、形式的特性については色と形のコード数が増加していることから、学習を通してより複雑な組合せなどにも着眼できる見方に変化したことが示される。グラフ4からは、大きな造形要素である色や形に関するコード数が減少しているが、初期段階にはなかった動作や題材などに関するコード数が増加していることから、描かれている事物の詳細にも着眼しながら感じ取れる見方に変化したことが示される。

IV 成果と課題


本研究から、「視覚芸術の構成要素である色や形などを基に芸術家による創造と子どもによる創造とを媒介する原理を明確にした題材開発を行えば、芸術家が作品に表したイメージと子どものイメージとの共有が効果的に促され、子どもの美的知覚力を広げ深めることができるだろう」という仮説のもとで開発された、①初めの鑑賞→②表現→③終わりの鑑賞の学習構成による鑑賞題材は、


表2 学習の初期段階と最終段階における児童の知覚内容の変化


※概念的カテゴリは以下の記号で表記し、児童の記述内容の該当箇所をそれぞれの下線で示している。

題材的特性 (M: —), 感覚的特性 (S: —), 形式的特性 (F: ……), 技術的特性 (T: ---), 表現的特性 (E: ~~~), その他 (O: ---)


C1	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題:「憂鬱な僕」</p>	形	一つの顔が色々な方をむいていて手とかでみえない所もかくようにする。	・形の組合せ: 顔 (F)	形	正面と横を向いている顔が見えることと、ハンカチをかんでくやしそうにしていることと、まゆげが下がっていて悲しそうな感じを表している。	・動作による感情表現: くやしそう、悲しそうな(まゆげが下がって、ハンカチをかんで) (E) ・形の組合せ: 顔 (F)
	色	色は線から色をはみださないようにして表現する。	・色に関する技能 (T)	色	ピカソの泣く女は、かみの毛に黒以外の色を使っていることが分かった。背景の色を右から真ん中にかけて色がこくなってまん中から左にかけて色がうすくなっていることが分かったこと。	・非写実的な色: 髪 (S) ・色の組合せ: 背景 (F) ・髪の毛、背景 (M)
 <p>題:「悲しみにこらえきれない私」</p>	形	ピカソの絵は、ほとんど二重であたりしてとてもおもしろい形なので私もおもしろく表現したい。	・形の組合せ (F)	形	ピカソの形でいい所は、口の中を <u>しっかり描いているのでおもしろい</u> と思った。ピカソは一つ一つ <u>しっかり描きこんでいて表現の仕方も上手だ</u> と思う。	・口の中 (M) ・形の詳細な描写 (S)
	色	色においては、とてもカラフルで明るい色を使っていて明るい感じが出ている。けれど中身は悲しんでいる。それがとてもおもしろい。	・カラフルで明るい色 (S) ・色による感情表現: 明るい、悲しんで (E)	色	色では、やっぱりピカソは、とてもカラフルな色を使っている。一色ではなく重ねてぬったりしてとてもそこを工夫していると思った。うすいぬり方ではなくこつりぬっている所もよい。	・カラフルな色 (S) ・色の重ね塗り (T) ・色のぬり方 (T)
 <p>題:「ものすごくやさしい僕」</p>	形	今にも泣き出しそうな形を表したい。	・形による感情表現: 泣き出しそうな (E)	形	ピカソのハンカチの複雑な所も描いているのがすごい。	・形の詳細な描写: ハンカチ (S)
	色	この女の人みたいにきれいな色を使っていきたい。	・きれいな色 (S)	色	色では、髪の毛をほんほん色を変えた。でも、ピカソの髪と比較すると、ピカソの方が黒っぽいけど目立っている。そこをまねしたかった。背景は、色を使い分け、くやしさと悲しさを表せたと思う。ピカソの背景には勝てたと思う。涙の色を紫にしてくやし涙にした。	・色の組合せ: 髪 (F) ・背景 (M) ・目立った色 (S) ・色による感情表現: 背景、涙 (E)


C4	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣くまくる僕」</p>	形	<p>ヘンテコな顔の形だけでなく、<u>おく深い意味を秘めているような形で表現したい。</u></p>	<p>・形のデフォルメ：顔 (S) ・形による感情表現：奥深い (E)</p>	形	<p>形においては、<u>ハンカチをちぎれそうなほど力強く噛んでいて、かなり怒っているのが分かる。</u> <u>涙も変わった形をしているので、すごい感性をもっている人なんだと思った。</u></p>	<p>・動作による感情表現：怒って (ハンカチを噛んで) (E) ・形のデフォルメ：涙 (S) ・その他 (作家の感性に対する驚き) (O)</p>
	色	<p><u>色は感情によって色を変え、影はそれに合ったような色を使いたい。</u></p>	<p>・色による感情表現：(E) ・影 (M)</p>	色	<p>自分の作品とピカソの作品を比べてみると、<u>色も不思議な感じをかもし出しているのが分かった。</u></p>	<p>・色による感情表現：不思議さ (E)</p>


C5	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「悲しくくやしくてお酒を飲みまくる僕」</p>	形	<p><u>まるっこい顔のりんかくではなくかくかくしている感じを表現したいです。</u></p>	<p>・形のデフォルメ：顔 (S)</p>	形	<p>初めは、ただ泣いている女の人にしかみえなかったけど、今は<u>悲しみやいかり、くやしさが伝わってきました。</u></p>	<p>・形による感情表現：いかり、悲しみ、くやしき (E)</p>
	色	<p><u>泣いているなみだの色をなみだっぽくする。</u></p>	<p>・色による感情表現：泣いている (涙) (E)</p>	色	<p>そして、背景の黄色から<u>だんだんオレンジ色に変わっていてとってもすごいです。</u></p>	<p>・背景 (M)</p>


C6	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「別れのわたし (望まぬ別れ)」</p>	形	<p><u>横顔の様で横顔じゃない正面でもない両方がくみあわさった絵はミステリアスな形だと思った。そういうところをマネして描きたい。</u></p>	<p>・形の組合せ：顔 (F) ・形の組合せによる感情表現：ミステリアスな (顔) (E)</p>	形	<p><u>髪の毛を逆立たせ、怒りを表現した。手もとんがらせて怒ってるんだというのを分かってもらえるようにした。歯をくいしばらせてくやしい悲しいというのを描いた。</u></p>	<p>・形による感情表現：怒っている (髪の毛、手) (E) ・動作による感情表現：くやしい、悲しい (くいしばった歯) (E)</p>
	色	<p><u>緑から黄色から色がたくさん使われていておもしろいカラフルな色合いなのに悲しく怒りくるっているから、逆にいい味がでているなあと考えた。私もカラフルとまではいかないけれどちょっとしたギャップを描いていきたい。</u></p>	<p>・カラフルな色 (S) ・色による感情表現：悲しい、怒り (E)</p>	色	<p>色では主に赤系を使って怒りを表現した。水色や青をあまり使わなかったのは悲しみよりも怒りの方が大きかったからだ。再度鑑賞してみて、<u>ピカソのすごさが改めて分かった。ピカソは自由に様々な色を使って感情を表現しているから楽しかった。</u></p>	<p>・色の統一性 (F) ・色の組合せによる感情表現：怒り (E) ・その他 (作家へ尊敬の念、共感) (O)</p>

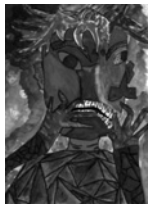
美的知覚力を高める図画工作科の鑑賞題材

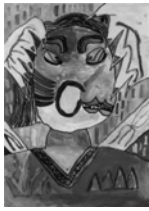
C7	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「哀れな女」</p>	形	<p>色々な角度（正面＋横顔とか上向き＋横顔とかそんな感じの）から描いてみたい。片腕、手、うでの動きなどに気をつけたい。</p>	<p>・形の組合せ：顔(F) ・動作：片腕、手、腕(S)</p>	形	<p>最初、ピカソの絵は何も理解できなかったけど、<u>すごい立体的だし感情が伝わってくる。顔だけでなく手、背景、仕草までを利用して感情表現してしまうなんて心底すごいー。と思った。</u></p>	<p>・形による立体感(F) ・動作による感情表現：顔、手、仕草(E) ・題材による感情表現：背景(E)</p>
	色	<p>普通に顔は肌色、髪は黒色(茶色)というのではなく、<u>緑や青、黄色といったような、意外な感じの色を使いたい。</u></p>	<p>・非現実的な色：顔、髪(S)</p>	色	<p>色も効果的に自分のものにしていて本当天才だなーとつくづく思った。<u>色の重要性、色の効果に気付かされた。ピカソの天才さにも改めて気付くことができた。</u></p>	<p>・その他(作家への尊敬の念)(O) ・色による感情表現(E)</p>

C8	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「悲しそうな私」</p>	形	<p>鼻や口を横に移動しているから、私は、鼻や口を横などに移動させてかきたいと思う。</p>	<p>・形のデフォルメ：鼻、口(S)</p>	形	<p>ピカソの絵はハンカチをかみしめているから顔をみて泣いているような感じがした。</p>	<p>・動作による感情表現：泣いている(ハンカチを噛みしめる)(E)</p>
	色	<p>はだにはない色を使っているから、<u>はだにはない色を使って悲しさや怒りを表現しよう</u>と思う。</p>	<p>・非現実的な色：肌(S) ・色による感情表現：悲しさ、怒り(肌)(E)</p>	色	<p>できあがった自分の絵とピカソの絵「泣く女」を比べてピカソの絵は、泣いている女の人の顔の色をだんだんと黄色から黄緑へ変わっているのに、私は真中でかけて色をぬっている。だから4つに分けた。半分から上と半分から下は同系色なのでピカソみたいに色をだんだんとかえていぬり方をしたら良かったなと思った。</p>	<p>・色の組合せ：顔(F)</p>


C9	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「苦しむ私」</p>	形	<p>私は、色々な形を混ぜて、<u>悲しみの気持ちを表現したい。</u></p>	<p>・形の組合せによる感情表現：悲しみ(E)</p>	形	<p>ハンカチをかみしめていることから、<u>また、新しい感じ方ができていい。</u></p>	<p>・動作による感情表現：新しい感じ方(ハンカチを噛みしめる)(E)</p>
	色	<p>とても不気味な色。髪の毛の色が黄色で、きれいな色という感じがするけれど、あの顔に黄色い髪の毛だと気持ち悪い。でも、私も少し不気味な色で表現したい。</p>	<p>・色による感情表現：不気味な(髪、顔)(E)</p>	色	<p>ピカソの作品は1つの作品に、<u>たくさんの感情が表れているからすごい。そして、色の使い分けがものすごく上手。かげがふつうの黒じゃなくて緑を使って不思議な色で表現しているのがおもしろくてすごい。色も、「何でこんな色なんだと思うくらいの色を使用して、とても変な絵だと感じた。」</u></p>	<p>・たくさんの感情、不思議な、変な(E) ・非現実的な色：影(S) ・色の使い分け(S) ・その他(作家への尊敬の念)(O)</p>


C10	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣き、はぶてる私」</p>	形	<u>とってもおもしろい形を表現しているから私も不思議なかたちで描きたいと思う。</u>	・形のデフォルメ(S)	形	私もピカソみたいに半分から右と左で表情を変えて描いている。だからとっても違和感がある。でもピカソは、全くちがう表情を右と左にかいでも一つもいわかんない。ここがピカソのすごい所だと思った。やっぱり真似できない。ピカソは天才な画家だと改めて感心した。	・形の組合せ：顔(F) ・その他(作家への尊敬の念)(O)
	色	<u>一色じゃなくて色々な色でカラフルにぬっていきたい。</u>	・カラフルな色(S)	色	私は色を変えてぬる時くぎってぬっていた。だけどピカソはじょよに色を変えていつている。	・色の組合せ：顔(F)


C11	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「たくさんの怒り」</p>	形	ピカソはいろんな角度から人物を描いているので、ほくもいろんな角度から描く。	・形の組合せ：人物(F)	形	(記述なし)	
	色	<u>主役の僕を工夫したい。なので浮き上がるように立体的にかきたい。</u>	・色による立体感(F)	色	ピカソの絵は横に鼻をかいているのに2つの穴をかいていることや手をいろんな角度にしりなどしかりませんでした。でもピカソにはまだ発見がありました。それは人物がうきあがりその絵にあった背景をぬっていたことです。なのでほくも人物をうき上げらせるようにしました。まだまだ発見があるかもしれません。ピカソは背景を使って女の人をうき上げらせている所はとってもいいです。自分ではためたと思う。色までも組み合わせるところがすごいです。	・背景(M) ・その他(新しい発見の喜び)(O) ・色の組合せ：背景(F)


C12	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「黒目のストレスがたまった僕」</p>	形	<u>泣いている感じがはっきり伝わるように形を工夫したい。</u>	・形による立体感(F)	形	<u>形において、顔の大きさ、手の太さが、自分では、大きく描いたつもりなのにまだまだピカソにはかきません。顔の表面のゴツゴツ感もピカソは上手く表現していた。</u>	・形のデフォルメ：顔、手(S) ・質感：顔(S) ・その他(作家への尊敬の念)(O)
	色	<u>色彩感覚パッチグーにして表情を分かりやすく表現したい。</u>	・色による感情表現(E)	色	ピカソは遠近法を上手に色のぬり方を工夫して楽しんでいたと思う。	・色による遠近法(T) ・その他(作家への共感)(O)


美的知覚力を高める図画工作科の鑑賞題材


C13	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「悲しみ泣く僕」</p>	形	<p>立体的な形に描きたい。そして、怒りや哀しみの形を表現したい。</p>	<p>・形による立体感 (F) ・形による感情表現：怒り、悲しみ (E)</p>	形	<p>ピカソは、かみの毛や顔を三角形や四角形でほとんど表しているのすごいと思った。ピカソにチャレンジしてピカソは顔の色を色々にしていて目もハゲタカにしていて細かい作業までしていると思った。</p>	<p>・形の統一性：髪の毛、顔 (F) ・形のデフォルメ：目 (S)</p>
	色	<p>肌の色や影をちゃんとつけた。立体的に色をつけたい。</p>	<p>・色や影 (S) ・立体的な色 (F)</p>	色	<p>ピカソにチャレンジしてピカソは顔の色を色々にしていて目もハゲタカにしていて細かい作業までしていると思った。背景も一つ一つ違う色でぬっているのすごいと思った。ピカソに近づくのはかなり難しいことが分かった。</p>	<p>・色の組合せ：顔、背景 (F) ・その他(作家への畏敬の念) (O)</p>

C14	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣くじゃくる不気味な僕」</p>	形	<p>いろいろな角度からモデルをかいているピカソのように形を描いていきます。</p>	<p>・形の組合せ：人物 (F)</p>	形	<p>ピカソの女のすごい所は、形においてハンカチをかんだり目をハゲタカにしたり、怒りという感情をうまく形で表現できていてすごい。</p>	<p>・動作と形による感情表現：怒る(ハンカチを噛む、目のデフォルメ) (E)</p>
	色	<p>現実生活中に生活している人間の色じゃないような赤や緑の髪など描いて感情を出しているのが派手な色を使いたいです。</p>	<p>・色による感情表現 (E)</p>	色	<p>色においては、うでを緑から黄色にかえて、かげと光がうまく調和してリアルになっている。僕は今度やる時は色をよりリアルに出させるようにがんばりたい。</p>	<p>・色の組合せ：うで (F) ・その他(表現への意欲) (O)</p>

C15	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「悲しみにくれ泣き叫ぶ私」</p>	形	<p>近くで見ると実際にはありえない形なので、そこに気をつけて描きたい。</p>	<p>・非現実的な形 (S)</p>	形	<p>形において正面顔と横顔の表現はできました。でも、ピカソと比べたら私のはふつうの人間にしか見えませんでした。</p>	<p>・形の組合せ：顔 (F)</p>
	色	<p>赤や黄色、黄緑色、オレンジなど明るい色を使っているので、私も明るい色を使いたい。</p>	<p>・明るい色 (S)</p>	色	<p>色において、怒りと悲しみを表現して顔の色を塗りました。自分なりに水をつけずにぬったつもりでもピカソのごつごつしたぬり方には近づけられませんでした。それだけピカソが天才だということが最後になって分かりました。</p>	<p>・色による感情表現：怒り、悲しみ(顔) (E) ・色作りにおける水加減 (T) ・その他(作家への畏敬の念)</p>

C16	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣きそうな私」</p>	形	今回みたいに <u>悲しみを描いた形を参考にして</u> 、普段の自分の喜怒哀楽を表現したい。	・形による感情表現：悲しみ (E)	形	ピカソも描いている <u>笑っている時にできる口元の種類のしわを私もかいていた所は新発見</u> 。顔の手前は横顔で反面は正面顔、女性、特有のまつ毛の長さなど、ピカソは表現したいものを大胆に描いている。私もそこを見習って横顔に目を吊り上げたりした。ひとみの中のハゲカカもまねしようと思ったけれどとても難しくできなかった。ピカソはすごいなあと改めて私は思った。	・口元のしわ (S) ・女性のまつ毛 (M) ・形の組合せ：顔 (F) ・形のデフォルメ：目 (S) ・その他 (作家への尊敬の念) (O)
	色	<u>色々な色</u> をピカソは使っています。 <u>人間の肌とは違う色</u> を使っているけれど、それはそれでおもしろいので自分の作品にも取り入れていきたいです。	・色々な色、非現実的な色：肌 (S)	色	(記述なし)	

C17	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣く女」</p>	形	<u>泣いている形を表現したい</u> 。 <u>感じを出したいです</u> 。	・形による感情表現：泣いている (E)	形	<u>正面や横などを向いているから、泣いている感じが出ている感じがしました</u> 。	・形の組合せによる感情表現：泣いている (顔) (E)
	色	<u>カラフルな色</u> になっているから <u>いろんな気持ちが混じっているんだと思いました</u> 。	・色による感情表現：いろんな気持ち (E)	色	<u>カラフルな色をぬってから、感じができるようにしてから、カラフルな色にしました</u> 。 <u>なみだの色も工夫したからいい感じがでてよかったです</u> 。	・色による感情表現 (E)

C18	児童作品	初期段階		最終段階		
		記述内容	コード(カテゴリ)	記述内容	コード(カテゴリ)	
 <p>題：「泣き叫ぶ僕」</p>	形	<u>泣き叫んでいるように鼻水を流させたい</u> 。	・動作：泣き叫ぶ (S)	形	形では <u>ハンカチをかんでなみだを流していないのに泣いているようでくやしそうにしている</u> 。	・動作による感情表現：泣いているよう (ハンカチを噛む) (E)
	色	<u>髪の色を一本一本変えた</u> い。 <u>白目の色を変えた</u> い。	・非現実的な色：髪、目 (S)	色	色では <u>顔の色を変えていたり、かみの色を一本の途中から色を変えている</u> 。ピカソは絵を楽しむながら描いていたと思う。	・色の組合せ：顔、髪 (F) ・その他 (作家への共感) (O)

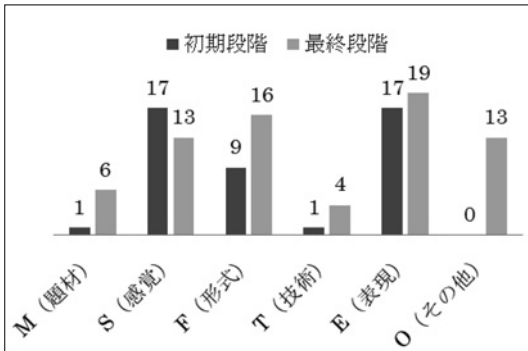
作品の美的特性に関する知覚力を高め、子ども一人ひとりが自らの感性を基に自分にとっての意味を生成するために有効であることが示された。

今後の課題としては以下の2点が挙げられる。1点目は、子どもの美的知覚力の質的な深まりを効果的に促す題材の構成原理をさらに明確化していくことである。芸術教科である図画工作科は学校の中で情操教育としての役割を中心的に担っており、子ども一人ひとりの感情の働きを人間性の

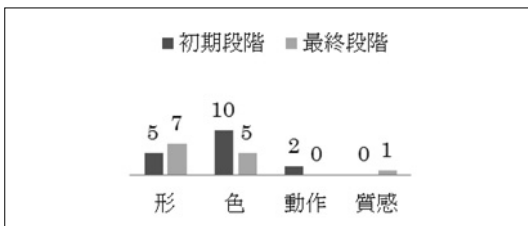
ある感情の働きへと高める目標を持っている。本研究で開発された題材では、人間の基本的な感情である悲しみや怒りなどに対する感受性を広げ深める段階にまで学習が進められたが、学習者個人のレベルから人間理解につながる感情の働きの普遍的なレベルへと高められる道筋を学習の中でつくっていくことについても今後考えていきたい。2点目は、他者との交流が美的知覚力に及ぼす影響とそれを活用した効果的な指導法の開発であ

表3 学習の初期段階と最終段階における概念的カテゴリーの内容変化

概念的カテゴリー	初期段階のコード項目 (コード数) 【コード総数: 45】	最終段階のコード項目 (コード数) 【コード総数: 71】
M: 題材的特性	影(1)	髪の毛・背景(1)、背景(3)、口の中(1)、女性のまつ毛(1)
S: 感覚的特性	非現実的な形(1)、形のデフォルメ〈顔(2)、鼻・口(1)、その他(1)〉、明るい色(1)、カラフルで明るい色(1)、カラフルな色(2)、きれいな色(1)、非現実的な色〈顔・髪(1)、髪・目(1)、肌(1)〉、色々な色・非現実的な色: 肌(1)、色や影(1)、仕草〈片腕・手・腕(1)、泣き叫ぶ(1)〉	形のデフォルメ〈涙(1)、目(2)、顔・手(1)〉、形の詳細な描写〈ハンカチ(1)、その他(1)〉、口元のしわ(1)、目立った色(1)、カラフルな色(1)、色の使い分け(1)、非写実的な色〈髪(1)、影(1)〉、質感: 顔(1)
F: 形式的特性	形の組合せ〈顔(3)、人物(2)、その他(1)〉、形の組合せ: 人物(2)、形による立体感(1)、色による立体感(1)、立体的な色(1)	色の組合せ〈背景(2)、髪(1)、顔(2)、顔・髪(1)、顔・背景(1)、背景(1)、うで(1)〉、色の統一性(1)、形の組合せ: 顔(4)、形の統一性: 髪の毛・顔(1)、形による立体感(1)
T: 技術的特性	色に関する技能(1)	色の重ね塗り(1)、色のぬり方(1)、色による遠近法(1)、色作りにおける水加減(1)
E: 表現的特性	泣き出しそうな: 形(1)、泣いている〈形(2)、色(涙)(1)〉、悲しみ〈形(1)、形の組合せ(1)〉、怒り・悲しみ: 形(1)、悲しい・怒り: 色(1)、悲しさ・怒り: 色(肌)(1)、奥深い: 形(1)、ミステリアスな: 形の組合せ(顔)(1)、明るい・悲しんで: 色(1)、いろいろな気持ち: 色(1)、不気味な: 色(髪・顔)(1)、その他: 色(3)	怒り・悲しみ・くやしき: 形(1)、怒り・悲しみ: 色(顔)(1)、怒り: 色の組合せ(1)、怒る: 動作と形(ハンカチを噛む・目のデフォルメ)(1)、怒っている: 形(髪の毛、手)(1)、怒って: 動作(ハンカチを噛んで)(2)、泣いている: 形の組合せ(顔)(1)、泣いているよう: 動作(ハンカチを噛む)(2)、不思議さ: 色(1)、たくさんの感情・不思議な・変な(1)、くやしそう・悲しそうな: 動作(まゆげが下がって・ハンカチをかんで)(1)、くやしき・悲しい: 動作(くいしばった歯)(1)、その他〈色(その他)(2)、色(背景、涙)(1)、動作(顔、手、仕草)(1)、題材(背景)(1)〉
O: その他	(該当なし)	・その他〈作家への尊敬の念(5)、作家への尊敬の念・共感(1)、作家への畏敬の念(2)、作家への共感(2)、作家の感性に対する驚き(1)、新しい発見の喜び(1)、表現への意欲(1)〉



グラフ1 「初期段階」と「最終段階」におけるコード数の変化



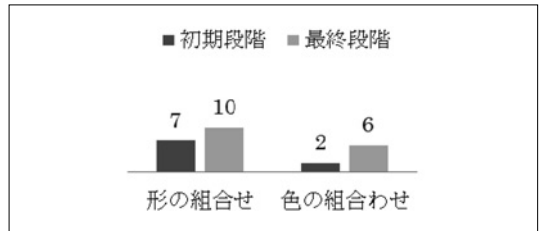
グラフ2 感覚的特性に関する着眼点の変化

る。実践研究を通して、他者との交流によるイメージの共有が一人ひとりの美的知覚力を高めることに有効であることが示唆され、今後の研究を通して確認していきたいと考える。

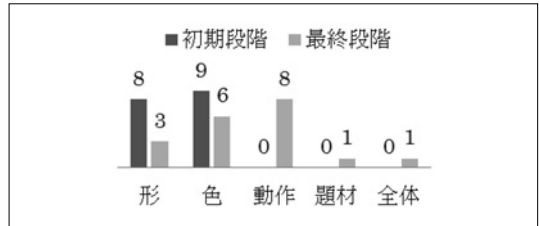
本研究は、我が国の図画工作科において、美術の専門的な知識・技術の体系に裏付けられたカリキュラムの構造を考えていくために、題材レベルで行った実験である。今後は、題材レベルでのさらなる実験と合わせて、カリキュラムの全体構造に関する研究を進めていきたいと考える。ケッターリング・プロジェクトは1960年代後半、美的知覚プロジェクトは1970年代に行われたものであるが、世界的に影響を与えているDBAEの基盤となるカリキュラムの考え方を開発し、今日の米国の美術教育にも継承されている。今日における継承内容に関する研究を行うことから、我が国の図画工作科のカリキュラムをさらに見直していきたいと考える。

註

1 Clark, Gilbert A, Day, Michael D., and Greer, W. Dwaine. "Discipline-based Art Education: Becoming Students of Art." Discipline-Based Art Education: Origins, Meaning, and Development. Ed. Ralph A. Smith. Urbana and



グラフ3 形式的特性に関する着眼点の変化



グラフ4 表現的特性に関する着眼点の変化

Chicago: University of Illinois Press, 1989. 129-193.

- Sabol, Robert. "Art Education in the United States." 日本美術教育連合・芸術教育文献アーカイビング研究会主催による全米美術教育学会会長ロバート・セイボル博士による招待講演 (2012年11月4日)
- これまでにを行った実践研究については以下の報告書に記録している。「小学校における学習指導の改善充実に関する研究 その2 (東広島市教育委員会との連携、研究協力に基づく共同研究)」『広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書 (第4巻)』, 広島大学大学院教育学研究科, 2006, pp.33-36
- エリオット W. アイズナー (仲瀬律久他訳), 『美術教育と子どもの知的発達』, 黎明書房, 1986, pp.203-210.
- 拙稿, 「H. S. プロウディの美的教育論に関する一考察」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要1部』 (第52号), 2004, pp.145-153.
- Eisner, Elliot W., Educating Artistic Vision. New York: the Macmillan Company, 1972, 177.
- Broudy, Harry S., The Uses of Schooling. New York and London: Routledge, 1988.
- 佐藤郁哉, 『質的データ分析法: 原理・方法・実践』, 新曜社, 2008.